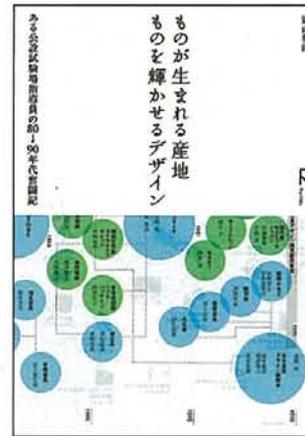


# ものが生まれる産地 ものを輝かせるデザイン ある公設試験場指導員の80→90年代奮闘記

影山和則著 ラトルズ刊 定価2310円



ど忘却していた私自身が驚愕したほどだ。私はなんと傍若無人で失礼な態度をとってきたのだろうか。春日部桐箱工業協同組合にもデザインを導入、そこでも私の激しさが描写されている。その経緯がここまでまとめられていることに、心から感謝したい。

1980年代は経済的に激動の真只中にあった。バブル経済が始まり、やがてバブル崩壊が訪れる。当時から日本は「東京中心主義」であり、この対抗と抵抗は地方で顕在化し始めていた。特に地方への「デザイン導入」は、伝統工芸産地の再活性化を目指していた。「東京には存在しない全国各地の伝統工芸を、デザインでなんとかしたい」

私は当時、ふるさと福井で伝統工芸産地と格闘していた。越前打刃物を「タケフナイフレッジ」として設立、商品開発を行っていた。今も「タケフナイフレッジ」は第2世代に引き継がれ続けている。その頃、私は影山さんとお出会う。本書では、私が影山さんにどれほど激しく厳しく対応していたかが記録されている。ほとん

本書は80年代の、デザイナーと地方の伝統工芸産地との意気込みの記録である。「日本のデザイン史」であるといつてもいい。私は影山さんだけでなく、周囲に対して確かに厳しく立ち向かっていた。それは私自身が自分を「生き返らせる」ために、自分を律していた姿勢であり、周囲への態度も、伝統工芸をデザインで「生き返らせたい」からである。今となっては、若かりし頃のこととお許しただきたい。

さて、現在の日本は国難である。「3・11は幕開け」に過ぎない。今後、さらに大きな日本の存在性問題に立ち向かうことになるだろう。少なからず80年代の気概を思い起こし、「デザイン」故に可能であることの模索を始めなければならぬ。本書はそのテキストになると思っている。

かわさき・かずお

デザインディレクター。大阪大学大学院教授・博士（医学）。公共ネットワーク機構理事。伝統工芸へのデザイン導入から制度設計などデザイン領域の拡大を目指している。創設された「危機管理デザイン賞」の総合審査委員長。

<http://www.kazuokawasaki.jp>